

「Radiologic Diagnosis of Polyps and Carcinoma of the Large Bowel」

著者 丸 山 雅 一 癌研究会病院内科

東京大学第1外科

武 藤 徹一郎

食生活の西欧化に伴って、近年わが国の大腸疾患の頻度が上昇しつつあることは周知の事実である。胃疾患でもそうであったように、大腸疾患においてもX常診断のはたす役割が広くそしてまた大きいことは説明するまでもないであろう。大腸疾患の半数以上、おそらくは90近くが癌とポリープによって占められているといつてよい。その90を占める疾患のX線診断学を扱った名著「大腸の癌・ポリープのX線診断と病理」の英文版がここに出版されたことは喜びにたえない。症例と写真が大幅に追加されているばかりか(468図)、内視鏡写真も加えられて内容が一層充実したものになっており、X線写真の印刷も日本語版よりきれいに見える。また、写真とその説明をそれぞれ別にまとめたために各頁がすっきりしている。わが国において大腸疾患への関心が高まりつつあった1974年に、本書の母体となった日本語版が出版され、その見事な注腸造影写真の数々に驚嘆したものである。この事が新しい注腸造影法の普及と向上に及ぼした影響は決して少なくなかったであろう。この頃から大腸二重造影法の一般的レベルは飛躍的に向上してきていると思われる。また、本書に示されているような大腸X線検査の理論に加うるに立

派な手本、目標があることは後から続く者達にとって大変ありがたくはげみになるに違いない。英文版の出版によって、欧米諸国に丸山博士の大腸X線診断学の理論と実際とその思想がより広く伝えられる機会が生れたことはまことに喜ばしいと思う。本書は欧米の専門家にも多大の影響を与えずにはおかまいだろう。

著者の丸山博士が消化管のX線診断学における第一人者であり、日本はもとより国際的にも活躍されている学徒であることを御存知の方は多いだろう。わが国において完成された胃X線診断学の優れた理論と技術が大腸のX線診断学に導入して、博士はこの分野に新天地を開拓した。ジャイロスコープを存分に使いこなして大腸検査の精度の向上がはかられた。本書はその一連の成果の結晶の総集編ともいえよう。序文によれば、この仕事を思いついたのが1970年頃というから、わずか数年の間にこれだけの仕事が完成されたことになる。驚嘆の他はない。これだけ短期間の間に、著者が愛情と誠心をこめて遂行した仕事であり撮った写真であるだけに、一枚一枚の写真が見る者を感嘆させずにはおかまい。それ程見事な写真が全頁を満たしていて、写真だけを見ても飽きることがない。X線写真には必ず切除標

本の肉眼写真ならびに組織像が対比されていて、病変のX線所見とマクロおよびミクロ所見との一対一の対比が忘れられていないことも本書の価値を一層高めている。肉眼的に診断できる病変はX線的にも診断可能なはずである、という著者の基本的な考え方が各症例について明確に示されているのである。このような完全な対比が可能であったのも、癌研という良き場に良き人の和があった賜であろうが、著者はそれを本書に見事に結実させてくれた。本書を読み終ってみて、注腸造影でこれだけ細かい所までわかるならば大腸内視鏡検査の役割は何かということを考えさせられてしまう。

本書は大腸疾患に興味のあるすべての人々に心からお勧めできる、と同時に丸山博士が本書に示された情熱をもって大腸の炎症性疾患のX線診断学についての同様な名著を著わされることを期待して止まない。

A 4 頁274 図28 写真413 原色図
27 1978 年 ¥12,000 円 600
医学書院刊